

## 第 15 回大会報告記

岡野浩史

日本アイリス・マードック学会第15回大会が2013年10月19日（土曜日）に明治学院大学白金キャンパスで開催された。11時から行われた総会において、平井会長、次期会長に就任することが決まった塩田勉理事から挨拶があった。平井会長からはそれまでの支持に対する感謝のことばがあり、さらに学会をより開かれたものにするため、今後も尽力していきたい旨、また塩田次期会長からは、学会の活性化に向けての提案が出された。また、事務局から橋本信子氏が副会長を勇退し、ポール・ハラ氏が新たに副会長となったこと、来年度の学会の第1候補は京都文教大学であるが、次期については、開催校の日程を優先するので、まだ未定である旨、報告があった。また、会員がマードック関連の論文等を公刊した場合は事務局に連絡するよう依頼があった。会計からは2012年度の決算報告書、2013年度予算案が示され、総会の承認を得た。

午後からの研究発表はまず、石本弘子氏の「*Nuns and Soldiers*における Anne Cavidge の分析」という題の研究発表が野口ゆり子氏の司会で行われた。Anne の精細な心理分析を中心に、作者マードックの宗教観にも迫る、発表者の思い入れのこもった発表であった。次の研究発表は、大道千穂氏による「恋する吸血鬼（ヴァンパイア）——*The Unicorn* のレズビアニズムを読む」と題するもので、片山亜紀氏の司会により行われた。まったく新たな領域への大胆な切込みと鋭い分析、そして目配りのきいた論旨は聴衆を魅了し、発表後の質疑応答は30分にも及んだ。おおいに盛り上がったあと、休憩をはさんで Paul Hullah 氏による “Also the Problem of Truth: Murdochian Murmurs of Browning” と題する研究発表があった。司会は筆者が務めた。ハラ氏は *Jackson's Dilemma* に埋め込まれたロバート・ブラウニングの詩 “The Last Ride Together” の詳細な分析から、ブラウニングの詩の手法がマードックの作品にも反映されており、ブラウニングがマードック理解の重要な手がかりとなることを

示した。研究発表の最後は榎本眞理子氏の「世界文学としての『苦海浄土』——石牟礼とウルフ」であった。司会は塩田勉氏。榎本氏は『苦海浄土』の世界を様々な資料とともに解説しながら、その文学的価値を説得的に詳述し、さらにバージニア・ウルフの *To the Light House* との比較により、石牟礼作品の世界文学としての普遍性を論じた。発表の後、司会の塩田氏からも熱のこもった『苦海浄土』の解説・礼賛のことばがあり、榎本氏の発表に対して感謝の意が表された。

研究発表が終了した後、特別企画である井内雄四郎氏と平井杏子氏による対談「アイリス・マードックを語る」があった。マードックを中心に、グレアム・グリーンからジャン・ポール・サルトルまで縦横の文学談義がなされ、きわめて刺激のかつ enlightening な対談となった。両氏の学識に脱帽である。

今回の学会の掉尾を飾ったのは、英国トマス・ハーディー協会副会長である深澤俊氏の「戦後イギリス小説の虚構」と題した特別講演であった。司会は当学会会長である平井杏子氏が務めた。深澤氏は戦後のイギリス小説が特殊な虚構の空間を作りだし、独自の小説世界を紡いでいった経緯をジョン・ファウルズの小説を例に、印象的なことばで語った。最後にマードックの *The Sea*, *The Sea* と *The Black Prince* とが取り上げられ、モーツァルトやシュトラウスの作品との関連から、音楽に深い造詣を持つ氏ならではの精緻な読みが披露され、聴衆に深い感銘を与えた。

特別講演終了後、場所を八芳園に移して、懇親会が行われた。特別講師の深澤俊氏、また、前々回の学会で特別講師を務めてくれた近藤耕人氏も出席し、にぎやかな談笑のうちにもまたたく間に時間が過ぎていった。

最後に、今回会場となった明治学院大学のポール・ハラ氏は多忙をきわめる中、万全の準備をして大会に臨んでくれた。氏のご尽力に心から感謝の意を表したい。